
『プワルタ・セレベス』のマレー／インドネシア語における形態法についての覚書

稲垣 和也

Abstract

This paper discusses the morphological aspects of Malay/Indonesian used in *Pewartu Selebes*, a newspaper published from 1943 to 1945 by Selebes Shimbunsha. *Pewartu Selebes* shows some features of Manado Malay spoken in North Sulawesi, such as reduplicated numerals with a collective meaning ‘all [numeral]’, plural formation with *orang* ‘man’, unique vocabulary like a generic trademark *tjap tikoës* ‘"Mouse" liquor’, and reciprocal prefix *bakoe-*, although they only appear in the pages with very limited frequency. In addition, the newspaper made extensive use of the hyphen between the two constituents of a compound, which is less used in modern spelling. This hyphen can contribute strongly to the diagnosis of compounds in modern Malay/Indonesian. This paper elucidates that the order of the two verbal/adjectival/adverbial constituents of a compound can be reversed only if the two constituents are in an antonym relation with each other and that a non-nominal compound may have a nominal usage only if the two verbal/adjectival constituents are not in a synonym relation with each other. These generalizations, in addition to the hyphenated compounds, may be applicable to the study on compounds in modern Malay/Indonesian.

1. はじめに

1942年1月11日、大東亜・太平洋戦争の中で日本軍は現インドネシア・スラウェシ／セレベス島にあるマナドを占領、2月9日にはマカッサルを占

領し、3月10日にセレベスにおける軍政実施を布告宣言した。日本海軍から委託を受けた毎日新聞社は、『セレベス新報』をはじめとする新聞発行を開始し、1942年12月8日にはセレベス新聞社を設立した。セレベス新聞社は、日本語による『セレベス新聞』と、マレー／インドネシア語による『プワルタ・セレベス』を創刊し、1943年5月27日にはメナド版の『プワルタ・セレベス』を創刊した（岸・西島 1959 : 157, 258 ; Post 2010 : 10, 33 ; Sato 2010 : 74 ; 早瀬 2016 : 77 を参照）。

末廣（1975）によると、岸幸一資料（マイクロフィルム）には、日本語による『セレベス新聞（メナド版）』が分類番号 D9-1113 として、マレー／インドネシア語による『PEWARTA SELEBES』が D9-1174 として所蔵されている。2019年より、日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所のデジタルアーカイブス「近現代アジアのなかの日本」に、岸幸一コレクション（2019）が加わり、上記の新聞原資料へのアクセスが容易となった。

本論文は、岸幸一コレクション（2019）の『プワルタ・セレベス』¹⁾（以下 *Pewartia Selebés* ないし *PS* と略す）を使用して、そのマレー／インドネシア語における形態法を記述し、考察を加えたものである。*Pewartia Selebés* のマレー／インドネシア語には、セレベス新聞社がメナド／マナドに支社を置いていたこともあり、マナド・マレー語（Manado Malay）からの影響が見られる。そのような特徴についても記述・考察をおこなった。適宜、日本語による『セレベス新聞（メナド版）』を参照し、日本語文との間の整合性を確認している。

以下、第2節では、綴り字およびその変異について記述する。形態統語論的記述として、第3節で派生、第4節で重複、第5節で複合、第6節で省略、第7節で *Pewartia Selebés* に見られるその他の特徴について記述をおこなう。

2. 綴り字

Pewartia Selebés では、同時代発行の *Borneo Simboen* と同様、「旧綴り」と呼ばれ



図1 : *Pewarta Selebes* 1943/5/29 (左), 1944/8/24 (右) (岸幸一コレクション 2019)

るムラユ語正書法が使われている。ほとんどが現代マレー／インドネシア語の綴りと同じだが、/u/ をあらわす *oe* (現代: u), /ɛ/ をあらわす *tj* (現代: e), /j/ をあらわす *dj* (現代: j), /x/ ないし /h/ をあらわす *ch* (現代: kh), /s/ をあらわす *sj* (現代: sy), /ñ/ をあらわす *nj* (現代: ny), /j/ をあらわす *j* (現代: y), /ʔ/ をあらわす ' (現代: 無し) が現代綴りと異なる²⁾。以下では *Pewarta Selebes* に見られる重音 (重母音や重子音) について記述する。

Pewarta Selebes には、(1) のような重音を含む固有名詞が見られる。なお、人名には *u* が使用される場合があり、*oe* と同じく /u/ をあらわす。

- (1) a. 人名 : Deetje, Doortje, Katuuk, Kumaat, Maaroel, Mangindaan, Paat, Polii, Rooroh, Saartje, Taas; Kullit, Manoppo, Pattinaja, Pussung,

Rotti, Salassa, Talodda, Warikki, Wullur

- b. 地名 : Poopo, Raanan, Soeloeoen, Talawaan, Tataaran, Toempaan,
Woeloemaatoes, Wolaang; Makassar, Minahassa, Posso,
Rembokken, Tompasso

アラビア語の(子音+)ハムザ+母音は重母音表記され、重母音表記を含むオランダ語、日本語はそのまま表記される(例:masalah「問題」、Maart「三月」、Dai Too-A「大東亜」、Syoowa「昭和」)。加えて、アラビア語からのmadjallah「雑誌」や tammat「終える、卒業する」、オランダ語からのappel「リンゴ」、英語からのdollar「ドル」の重子音もそのまま表記される。これらは、現代インドネシア語による単音表記、それぞれ masalah, Maret, majalah, tamat, apel, dolar と比される。このように、*Penarta Selebes* における、比較的新しい外来語のほとんどは、原語に対して忠実に表記される。

単子音/重子音の表記に揺れを見せる一般の語彙は多くはないが、以下のものが見つかっている。

- (2) a. dessa /desa 「村」
b. kotta / kota 「都市」
c. kissah / kisah 「物語」 ← アラビア語 qissa (Jones 2007 :156)
d. oemmat /oemat 「信徒」 ← アラビア語 umma (Jones 2007 :332)

3. 接辞添加による派生

3.1 述部の派生

Penarta Selebes には、現代インドネシア語と同様、(i) 接頭辞 ber- や meN- による動詞化、(ii) 接頭辞 di- や人称代名詞(相当語句)による受動化、(iii) 接頭辞 ter- による受動的な動詞形成、(iv) 接頭辞(mem) per- による使役動

詞化, (v) 接尾辞 *-kan* や *-i* による結合価の増大, (vi) 接頭辞 *ber-an* による相互／多方向動詞化等が見られる。

Pewartia Selebes では, 接頭辞 *ber-* の末尾の /r/ と語基頭の /r/ とが子音連続を成す場合がある。現代では *ber-* の /r/ が重音を避けるために削除される。以下, 各語の語基ないし派生語の形式を丸括弧に入れて末尾に付す。

- (3) a. berratoes-ratoes / beratoes-ratoes 「何百もの」 (ratoes 「百」)
b. berriboe-riboe / beriboe-riboe 「何千もの」 (riboe 「千」)
c. berreboetan / bereboet-reboetan 「奪い合う」 (mereboet 「奪う」)
d. berremboek / beremboek 「協議する」 (diremboek 「協議される」)
e. berroepa / beroepa 「～の形をした」 (roepa 「形」)

さらに, 接頭辞 *meN-* によって鼻音代償しない場合がある。現代の形式を丸括弧に入れて示す。

- (4) a. mengkabarkan / mengabarkan 「伝える」 (mengabarkan)
b. mengkagoemkan / mengagoemkan 「感心させる」 (mengagumkan)
c. mengkoeatkan / mengoeatkan 「強固にする」 (menguatkan)
d. mengkokohkan / mengokohkan 「強化する」 (mengkukuhkan)
e. mensabarkan 「我慢させる」 (menyabarkan)
f. mensoetjikan 「清める」 (menyucikan)

これら “*meN-* 語基 *-kan*” は能動の形式である。これに対応する受動の形式は, (i) “*di-* 語基 *-kan*” と, (ii) 代名詞的要素³⁾ に “語基 *-kan*” を続けた形式である。*Pewartia Selebes* ではどちらのタイプの受動形式も使われているが, (ii) のタイプの受動形式と見なし得るものの中には, 代名詞的要素の替わりに普通名詞が使われるケースが見られる。

- (5) [...] baroes rakjat oesabakan, soepaja lebih giat dan lebih banyak menanam sajoeran.
(PS 1944/4/25)

「より懸命により多く野菜を植えようと皆尽力しなければならない。」
(文法的受動に沿った訳：[...] 皆に尽力されなければならない。)

(5) の *rakjat + oesaba-kan* は, (ii) “代名詞的要素 + 語基 -kan” のパターンと類推され得る。*rakjat* 「人民」は, 本来的には普通名詞だが, (5) の記事の執筆者や *Pewartas Selebes* 側が 1 人称であることを考慮すると, 読者を含む 2 人称複数「皆の者」を指している可能性がある。

また, (ii) の受動形式のパターンとも, 能動形式のパターンとも考えられる例がある。

- (6) “[...] *Tiap-tiap negeri baroes oesabakan sendiri makanannya.*”
各々 くに (助動詞・義務) 尽力する 独り その食物
「各地方は独自に食物を育て (←尽力) なければならない。」
(PS 1944/4/22)

(6) の *oesabakan* は, 2 通りの受動形式 (i) *di-oesahkan*, (ii) 代名詞 + *oesahkan* のいずれにも該当しないが, (ii) のタイプを想起させる形式である。とはいえ, “語基 -kan” の直前に代名詞的要素が無く, 普通の受動形式とは異なる。*Pewartas Selebes* において, このような“語基 -kan” は, 一般の能動形式および受動形式と並んで頻繁に観察される。

(6) では, 特に, “助動詞 + *oesabakan*” という構成であることが注目される。同様の構成は, 関係節の中にも見つかると。(7) では *telah berikan* がこれにあたる。

- (7) [...] *Selebes Sinbun Sya dan Pewartas Selebes jg telah*
セレベス新聞社とプワルタ・セレベス (関係化) (助動詞・完了)

<i>berikan</i>	<i>kepertajaan</i>	<i>kepada</i>	<i>toean</i>	<i>Pantou,</i>
与える	信頼	～に	～氏	(人名)

「パントウ氏に信頼を寄せたセレベス新聞社とプワルタ・セレベス」

(PS 1944/1/1)

(7) の *Selebes Simbun Sya dan Pewarta Selebes* (以下 *SSS dan PS* と略す) は関係化され、後続する関係節 *yg telah berikan kepertajaan [...]* 「信頼を寄せた」によって修飾されている。マレー／インドネシア語で関係化されるのは基本的に主語であるため、*SSS dan PS* は、 *telah berikan kepertajaan* の下線部の空所を満たす主語だと考えられる。ここで、仮に *berikan* が受動形式だと考えると、(7) では *kepertajaan* 「信頼」が主語とな(りかつ関係化され)るはずだが、そうになっておらず、矛盾する。したがって、この *berikan* は能動形式だと見なす方が適切である。本論は、(6) と (7) のような“助動詞＋語基 -kan”の中の“語基 -kan”の部分 (*oesabakan, berikan*) を能動の形式と見なす。

上で見た受動の *di-* が添加されることで、語基頭の鼻音 (特に /m/) が脱鼻音化する (特に p となる) 場合がある⁴⁾。

- (8) a. *dipinta* 「求められる」 = *di-* + *minta* 「求める」
- b. *dipohon* 「請われる」 = *di-* + *mohon* 「請う」
- c. *dipoengkir* 「否定される」 = *di-* + *moengkir* 「否定する」 + *-i*

この脱鼻音化は、鼻音始まりの語基に広く見られるわけではなく、散発的な現象と考えられる。ただし、以下の (9) のように、(a) 鼻音のままの受動形式 (*diminta*) が従属節で用いられる一方で、(b) 脱鼻音化した受動形式 (*dipinta*) は従属節で用いられない。このように、両者が相補分布をなしている点は注目に値する⁵⁾。

- (9) a. *Penasehat akan memberikan pertimbangannya kepada Sikaityo [...], djika diminta.*
(PS 1944/2/17)

「顧問は、求められた場合に、市会長に助言をおこなう。」

- b. *Tiap2 pemain dipinta membawa alat-alat main sendiri.* (PS 1943/10/7)

「各（チェス）プレイヤーは各自の競技用具を持ってくることが求められる。」

受動形式に関連して、現代インドネシア語では、*mengerti*「理解する」の受動には例外的な形式の *dimengerti* が使われ、規則から導かれるはずの *dierti* は使われない。一方、*Penarta Selebes* では、*dierti* と *dimengerti* の両方の形式が見られる。

- (10) a. *Dalam babasa lain ada hal jang tak dapat disalin dan dierti.* (PS 1943/12/19)

「他の言語には（＝言語が違えば）、翻訳・理解できない事柄がある。」

- b. *Inilah jang kita katakan ratjoen bagi Chungking, jang ta' dapat dimengerti oleh Chiang Kai Shek.* (PS 1943/7/1)

「これこそが我々の言う重慶にとっての毒であり、蒋介石が理解し得ないことなのである。」

また、接頭辞 *ter-* が (mem) *per-* 動詞に添加した *tepergantoeng*「頼る、託す」という形式が見られる。Badudu (1986 :27) によると、(*Penarta Selebes* の発行地である) 北スラウェシでは、この派生形式が一般的な形式として使われている⁶⁾。

- (11) [*Pendjoelan boekoe ini*] DILOEAR KOTA *tepergantoeng dari pada pengiriman*.

(PS 1944/2/19)

「(広告：この本の販売は) 市外では配送に依ります。」

ところで、東インドネシアのマレー語では、相互行為の接頭辞 *baku-* が使われる (Paauw 2009 を参照)。*Pewartu Selebes* において、*baku-* の使用はほぼ皆無と言ってよいが、以下の例が見つかっている。

- (12) *Pertandingan boks atau worsteling (bakoe banting)* . (PS 1943/10/9)
「拳闘すなわち格闘の試合 (叩き合い)」

3.2 非述部の派生

現代インドネシア語と同様、(vii) 接尾辞 *-an, -nja*, 接頭辞 *peN-, pe-*, 接周辞 *peN-an, per-an, ke-an* による名詞化、(viii) 接頭辞 *se-* による「一」「同じ」「限り」等をあらわす語の派生などが見られる。

Pewartu Selebes に特徴的なのは、接周辞 *pe-an* による派生語が散見される点である。(13a) *pegelangan*, (13b) *pekabaran* については、それぞれ *per-an* 派生語の形式よりも使用頻度が高い。

- (13) a. *pegelangan / pergelangan* 「(手／足) 首」
b. *pekabaran / perkabaran* 「発表」
c. *pepindahan / perpindahan* 「移動」
d. *petimbangan / pertimbangan* 「検討」

現代インドネシア語の *pekabaran* は「福音伝道」をあらわすが、*Pewartu Selebes* の *pekabaran* はより一般的な「発表, 告知, 報道」という意味で使われ、現代の *perkabaran* 「報道」という、*per-an* 派生語の方に対応している⁷⁾。

また、行為者や道具をあらわす名詞を派生する接頭辞 *peN-* と指小辞の *si* について述べておきたい。現代インドネシア語では、この *peN-* 行為者名詞に *si* 「(指小冠詞)」が前置されるが、*Pewartu Selebes* では *si-* が *peN-* 名詞に接頭された形で綴られる。これは、前置詞の *di* 「～で／に」や *ke* 「～へ」が

接頭されて綴られているのと平行的である。

- (14) a. sipenanggoeng / si-penanggoeng 「責任者」
b. sipembeli / si-pembeli 「購買者」
c. sipendjoel 「販売者」
d. sipemohon 「申請者」

4. 重複語

本節では、*Pewartu Selebes* に特有と見なせる重複語を見る。

現代インドネシア語では総数を示すために接頭辞 ke- が数詞に添加される。同様に *Pewartu Selebes* においても、多くの場合は (15a) の *ke-doea*「二(総数)」, (16a) の *ke-lima*「五(総数)」のように“ke- 数詞”が総数を示すが、稀に (15b), (16b) のように重複を伴う“ke- 数詞 - 数詞”が総数を示す場合がある⁸⁾。

- (15) a. *Djerman dan Nippon. [...] Kedoea negeri pertjaja akan kekoetaan sendiri dan [...]*
(PS 1943/10/7)
「ドイツと日本。[...] 両国は各自の(軍事)力を確信しており、」
b. *Djoega daerah Minseibu, Ambon dan Manado, kedoea-doea Syuu itoe ditetapkan.*
(PS 1943/12/11)
「民政部直轄地域およびアンボン、メナド両州が指定された。」
- (16) a. *Kelima Pemimpin opsir Angkatan Laoet ini* (PS 1944/3/9)
「これら海軍中將の代表五名全員」
b. *Kelima-lima wartawan dari daerah pemerintahan Angkatan Laoet*
「海軍軍政地域の記者五名全員」 (PS 1943/12/23)

Stoel (2005: 26) によると、マナド・マレー語では数詞の重複が総数を示す(例: *dua-dua* 'all two, both')。(15b) と (16b) において余剰的に重複しているのは、マナド・マレー語の干渉が原因である可能性がある。

5. 複合語

マレー／インドネシア語における複合語は、*gambar hidoep* 「映画」や *berbesar moeloet* 「偉そうにした」のように、概してその構成要素がスペースを挟んで連続する。そのため、少なくとも文語において、単なる句と複合語とを見分けるには意味に依拠するほかない。しかし *Pewartas Selebes* では、複合語と見なすための表記上の特徴が顕著に見られる。これは、*Borneo Simboen* においても見つかると、構成要素をつなぐハイフン(例: *garis-depan* 「(戦場の)前線」, *pahit-getir* 「辛苦」; 稲垣 2020: 211) である。

以下では、ハイフン表記を見せる複合語について分類を試みる。*Pewartas Selebes* におけるハイフンは、機能語と内容語の境界(例えば 3.2 節の (14) で見た *si* 「(指小冠詞)」) 以外にも、接辞添加における形態素境界や、外来語の音節境界を示すために使われる場合があるが(例: *ke-diri-an* 「個性」, *Tiong-Hoa* 「中華」), これらのケースは除外する。必然的に、内容語と内容語を構成要素とする複合語を扱う。とりわけ、語基を構成要素とする複合語を中心に記述をおこなう。

複合語の構成要素として、名詞、形容詞、動詞、副詞が見つかる。名詞による複合語が最も多く、形容詞、動詞、副詞が続く。副詞による複合語は極めて少ない。

5.1 副詞による複合語

まずは最も少ない副詞による複合語を挙げる。頻度、時間、様相等の副詞は複合語には使われない。複合語に使われる副詞は限られており、*~ sekali* 「と

ても～」, *koerang* ～「あまり～でない」, *lebih* ～「もっと～」のほか, 散発的ではあるが, *amat* ～「極めて～」, *saling* ～「互いに～」も見つかる。

- (17) a. *sama-sekali* 「まったく」 (等しい—とても～)
b. *koerang-lebih* 「おおよそ」 (あまり～でない—もっと～)
[高頻度]
c. *lebih-koerang* 「おおよそ」 (もっと～—あまり～でない)
[低頻度]
- (18) a. *amat-sengit* 「極めて激しい」 (極めて—激しい)
b. *saling-mentjinta* 「互いに慈しむ」 (互いに～—慈しむ)

(17) と (18) は様々な点で異なる。(17) は, (i) ハイフンによる表記が頻出し (ただし (17c) は除く), (ii) 複合副詞として用いられ, (iii) 構成要素間に修飾関係が無く, (iv) 複合語の意味が非構成的で慣用化している。他方, (18) は, (i) ハイフンが散発的で, (ii) それ自体は複合副詞として用いられず, (iii) 副詞要素 (*amat, saling*) がもう一方の要素を修飾し, (iv) 複合語の意味が一つの句のように構成的である。したがって, (18) は複合語というよりも句に近い。上記の (ii), (iii) の特徴は, 主要部の有無に集約される。(17) の複合語には主要部が無いのに対し, (18) の複合語には主要部 (=後部要素) があり, “修飾部+主要部” の構成を成している。以下, 複合語の用例を示す。

- (19) *Sandiwara Minabasa [...] tiap² malam mendapat perbatian dan lebih-koerang 500 penonton.* (PS 1944/1/8)
「ミナハサ劇場は [...] 毎晩, 注目を集め, 約 500 人の観客(が来る)。」

- (20) [...] *peperangan itoe masih berlakoe dengan amat-sengitnja* (PS 1943/6/1)
 「戦争がはまだ極めて激しくおこなわれている (こと)」
- (21) [...] *menghargakan akan peri-kemanoesiaan dan perasaan saling-mentjinta akan sesama manoesia* (PS 1943/6/19)
 「人間的な振る舞いおよび人間同士の慈しみ合いの情を尊重する」

(20)と(21)において、各複合語はそれぞれの形態統語的プロセスの下で成立している。即ち、(20)では、“dengan + 形容詞 + -nja”に(18a)が埋め込まれ、一方、(21)では、“動詞 → 修飾部転換”に(18b)の動詞が埋め込まれている。このように、(18)のハイフン表記は、形態統語的プロセスの中に埋め込まれることで(散発的に)誘発されたと見ておきたい。

また、(17)の *koerang* は「～未満」、*lebih* は「～以上」を含意し、両者は反意の関係にある。頻度差はあるが、両者が(17b)と(17c)のように逆順になり得る点は注目に値する。

5.2 動詞による複合語

動詞+動詞によって作られる複合動詞は主要部を持たない。(22)排反等をあらかず対義語を連ねたものと、(23)類義語を連ねたものが見られる。

- (22) a. *mati-hidoep (nja)* 「生死」 (死ぬー生きる)
 b. *bangkit-djatoeh (nja)* 「興亡」 (興るー落ちる)
 c. *rebah-bangkit (nja)* 「興廢」 (倒れるー興る)
 d. (*menentoeakan*) *kalah-menang* 「勝敗 (を決める)」 (負けるー勝つ)
 e. *poelang-pergi* 「往復する」 (帰るー行く)

(23) a.	hantjoer-loeloeh	「砕け散る」	(大破する—砕ける)
b.	hilang-lenjap	「消失する」	(無くなる—失せる) ⁹⁾
c.	jakin-pertjaja	「確信する」	(信じる—信じる)
d.	laloe-linjap	「過ぎ去る」	(過ぎる—失せる)
e.	toeroet-tjampoer	「介入する」	(共にする—混じる)

(23) のような類義による動詞複合語は動詞として使われることが多いが、(22) のような対義による動詞複合語は、転換等により、名詞として使われることが多い。これは、特に排反的な対義の場合、一方が成り立てば他方が成り立たず、複合語自体を述部として使うのが困難になるからだと考えられる(「往復する」は、「帰る」「行く」の両方が成り立つよう、語彙的に先後を含んでいる)¹⁰⁾。

また、類義語を連ねた(23)は、複合語内の各動詞の位置は固定されており、前後の順序が逆になることはない。一方、対義語を連ねた(22)に関しては、ハイフン無しのものであれば、hidoep mati「生死」、djatoeh bangkit「興亡」といった逆順の構成も見られる。

名詞と動詞による複合語の場合、“名詞+動詞”の並びも“動詞+名詞”の並びも等しく名詞を作り出し、どちらのタイプも前部要素を主要部とする。とりわけ、“動詞+名詞”は必ず出来事をあらわす名詞となる。

(24) a.	gambar-hidoep	「映画」	(絵—生きる)
b.	pesawat-terbang	「航空機」	(機械—飛ぶ)
c.	pesawat-terbang-penjerang	「戦闘機」	(機械—飛ぶ—攻撃者)
d.	djalan-moendoer	「退路」	(道—退く)
e.	serangan-membalas	「反撃」	(攻撃—やり返す) ¹¹⁾

- (25) a. (*mentjapai*) tammat-sekolah 「卒業 (を遂げる)」 (終える—学校)
 b. (*menjampai*) terima-kasih 「感謝 (を伝える)」 (受け取る—愛情)
 c. (*penyakiti*) moentang-darah 「吐血 (の病気)」 (吐く—血)

複合語の多くは2語によるものだが、(24c)のような3語による複合語も観察される。

5.3 形容詞による複合語

“形容詞+形容詞”の複合語は、その大多数が主要部を持たない。(26) 反意語を連ねたもの、(27) 異なる意味を混淆させたもの、(28-32) 類義語を連ねたものが見られるが、類義語によるものが圧倒的に多い。

- (26) a. *ketjil-besar* 「大小の, 大人子供」 (小さい—大きい)¹²⁾
 b. *besar-ketjil* 「大小の」 (大きい—小さい)
 c. *tinggi-rendah* 「高い～と低い～」 (高い—低い)
 d. *toea-moeda* 「老若 (の者)」 (老いた—若い)
- (27) a. *gemilang-makmoer* 「栄華な」 (輝かしい—栄えた)
 b. *koeat-moeda* 「剛健・気鋭 (の者)」 (強い—若い)
 c. *pahit-getir (nja)* 「苦渋」 (苦い—渋い)
 d. *poetih-bersih* 「純潔無垢／清浄潔白な」 (白い—清い)
 e. *tinggi-moelia* 「高貴／崇高な」 (高い—貴い)

反意語による(26a, d)、および混淆による(27b)は、複合形容詞の用法に加え、人間(=当該の形容詞のあらかず属性を持つ)を指す名詞用法を持つ。

他方、類義語による複合語は、〈価値〉をあらかず *indah-permai* 「秀麗な」(美

しい—麗しい)に加え,〈困難〉,〈盛衰〉,〈凄まじさ〉をあらわすものや,〈物理的特徴〉,〈人間の特徴〉をあらわすものなど様々な意味範囲にわたる。

(28) 複合形容詞：類義；〈困難〉

- a. soekar-soelit 「困難な」 (難しい—難しい)
- b. soesah-pajah 「苦労した」 (つらい—酷い)

(29) 複合形容詞：類義；〈盛衰〉

- a. aman-sentosa 「平穩無事な」 (安全な—平穩な)
- b. roesak-binasa 「壊滅した」 (壊れた—滅びた)
- c. soeboer-makmoer 「栄華な」 (繁茂した—栄えた)

(30) 複合形容詞：類義；〈凄まじさ〉

- a. hebat-dahsjat 「凄まじい」 (凄い—物凄い)
- b. maha-hebat 「最も凄い」 (最上の一—凄い)
- c. maha-dahsjat 「最も物凄い」 (最上の一—物凄い)

現代インドネシア語における maha-「(偉大なる)」は,化石化した非生産的な接頭辞と見なされるが, *Penarta Selebes* では, 単独語としての表記が多いため, (30b, c)を複合語と捉えておきたい¹³⁾。さらに, この maha「最上の」は修飾部として機能していると見なすことができる。したがって, この複合形容詞は, 主要部を持った“修飾部+主要部”の複合語と考えることができる。

(31) 複合形容詞：類義；〈物理的特徴〉

- a. panas-terik 「焼け付くような」 (暑い—灼熱の)
- b. pandjang-lebar 「細部まで網羅した」 (長い—幅広い)

c. *penoch-sesak* 「超満員の」 (満ちた—詰まった)

(32) 複合形容詞：類義；〈人間の特徴〉

a. *gagah-berani / gagah-perkasa / gagah-p(e)rawira* 「勇猛果敢な」
(勇猛な—勇敢な)

b. *hemat-tjer(e) mat* 「質素儉約な」 (儉約な—儉約な)

c. *riang-gembira* 「歓喜した」 (喜ばしい—嬉しい)

d. *soeka-rela* 「自主的な」 (喜んで～する—喜んで～する)

e. *soeka-ria* 「歓喜した」 (喜んで～する—嬉しい)

一方、少数だが、“形容詞＋名詞”による複合語がある。(33)の3例のように、後部要素が *hati* 「心」であれば、前部要素を主要部とする複合形容詞として使われる。一方、それ以外の(34)のような“形容詞＋名詞”は、マレー／インドネシア語の名詞修飾構造に反し、後部要素を主要部とする複合名詞として使われる。ただし、(34)に挙げた複合語のうち、*roekoen-tetangga* 「隣組」¹⁴⁾以外のものは使用頻度が極めて低い。

(33) a. *boelat-hati* 「誠意のある」 (丸い—心)

b. *rindoe-hati* 「慕情を抱いた」 (恋しい—心)

c. *soesah-hati* 「憂鬱な」 (つらい—心)

(34) a. *roekoen-tetangga* 「隣組」 (仲の良い—隣人)

b. *djernih-djoevita* 「純潔の恋人」 (澄んだ—恋人)

c. *terang-tjoeatja* 「快晴の天候」 (明るい—天候)

d. *genting-tanah* 「地峡」 (狭い—土地)

e. *indab-tamasja* 「美しい景観」 (美しい—景観)

マレー／インドネシア語では、普通“名詞＋形容詞”の順序で形容詞が名詞を修飾する。当然のことながら、(33)、(34) で見た“形容詞＋名詞”の複合語よりも、“名詞＋形容詞”の順序の複合語、即ち (35) のような、前部要素を主要部とする複合語の方が多く見つかる。

- | | | | |
|------|--------------------|-----------|------------|
| (35) | a. hari-raja | 「祭日」 | (日一大きい) |
| | b. koelit-poetih | 「白色 (人種)」 | (皮膚一白い) |
| | c. orang-toea | 「親」 | (人一老いた) |
| | d. tanah-lapang | 「広場」 | (土地一広い) |
| | e. Brittain-Baroe | 「ニューブリテン」 | (ブリテン一新しい) |
| | f. Laksamana-Moeda | 「海軍少将」 | (海軍大将一若い) |

5.4 名詞による複合語

ハイフン表記の複合語に最も多く見つかるパターンは“名詞＋名詞”である。この複合語はほぼ全てが名詞として使われる。他の内容語による複合語と同じく対義語や類義語の複合語もあるが、“主要部＋修飾部”のパターンが圧倒的に多い。以下、まずは主要部を持たない名詞複合語として、(36) 対義語を連ねたもの、(37) 異なる意味の混淆、(38) 類義語を連ねたものを挙げる。

- | | | | |
|------|------------------|--------|---------|
| (36) | a. siang-malam | 「日夜」 | (昼一夜) |
| | b. lahir-bathin | 「身も心も」 | (外面一内面) |
| | c. djiwa-raga | 「心身」 | (精神一肉体) |
| | d. iboe-bapa | 「父母」 | (母一父) |
| (37) | a. tanah-air | 「祖国」 | (土地一水) |
| | b. roemah-tangga | 「家庭」 | (家一階段) |

- | | | | |
|----|--------------|------|-------------------------|
| c. | boedi-djasa | 「善行」 | (徳一貢献) |
| d. | darah-daging | 「血肉」 | (血一肉) |
| e. | barat-daja | 「南西」 | (西一内陸側／南) |
| f. | barat-laoet | 「北西」 | (西一海側／北) ¹⁵⁾ |
-
- | | | | | |
|------|----|----------------|--------|-------------|
| (38) | a. | warta-berita | 「ニュース」 | (ニュースーニュース) |
| | b. | adat-istiadat | 「風俗習慣」 | (慣習一慣習) |
| | c. | awal-moela | 「発祥」 | (初め一始まり) |
| | d. | daja-oepaja | 「奮闘努力」 | (力一努力) |
| | e. | oesaha-tenaga | 「奮闘努力」 | (尽力一力) |
| | f. | sifat-perangai | 「気質」 | (性質一品性) |
| | g. | tipoe-daja | 「欺瞞」 | (騙し一欺き) |

5.1-5.3 節の記述の通り，副詞，動詞，形容詞の場合は，わずかだが逆順による複合語が見られた。一方，名詞複合語の場合，逆順が可能なものは見つかっていない。

複合名詞のうち，“主要部＋修飾部”の場合に限り，ハイフンもスペースも挟まずに一続きで綴られる場合がある。ただし，以下の(39a)は一続きの表記が極めて稀である。逆に，(39b)はハイフン表記が極めて稀である。ハイフンが語境界の一種の現れであることを考慮すると，一続きで表記されることの多い(39b)の方が，(39a)よりも語としての統合度が安定していると言える。

- | | | | | |
|------|----|--|-------|----------|
| (39) | a. | <i>tatanegara</i> (PS 1943/6/8) = <i>tata-negara</i> | 「法令」 | (決まり一国) |
| | b. | <i>matahari</i> = <i>mata-hari</i> (PS 1943/6/22) | 「太陽」 | (目一日) |
| | c. | <i>djoeroetafsir</i> | 「解説者」 | (専門家一解釈) |
| | d. | <i>djoeroetoelis</i> | 「助役」 | (専門家一筆記) |

(39c, d) にはハイフン表記が無く、一続きの表記が見ついているのみである。(39c, d) に含まれる *djoeroe* 「専門家」は生産性が高く、多くの複合語を作る。ほかにも, *djoeroe-bitjara* 「スポークスマン」(専門家一話), *djoeroe-kabar* 「記者」(専門家一ニュース) などがあり, これらは (39c, d) とは違って, ハイフン表記も一続きの表記も見ついている。

“主要部+修飾部”の複合名詞のうち, *Penarta Selebes* において最も頻度の高い部類のものとして (40) の例が挙げられる。

- (40) a. *medan-perang* 「戦場」 (場一戦争)
b. *motor-torpedo* 「魚雷艇」 (原動機一魚雷)
c. *oto-wadja* 「装甲車」 (車両一鋼鉄)
d. *bola-kaki* 「蹴球」 (球一足)

また, *iboe-kota* 「首都」(母一都市) の使用頻度も高い。ただし, この複合語は後部要素である *kota* を主要部とするため, (40) とは逆順の修飾関係を持った, 極めて稀な複合名詞である。逆順である原因は, この複合語が翻訳借用によって形成されたからだと思われる。

その他, 比較的高頻度の“主要部名詞+修飾部名詞”には, (40a-c) と同様, (41) のような戦争関連の複合名詞が含まれる。

- (41) a. *bahaya-oedara* 「空襲警報」 (危険一空)
b. *pesawat-moesoeh* 「敵機」 (飛行機一敵)
c. *senapan-mesin* 「機関銃」 (銃一機械)
d. *serangan-oedara* 「空襲」 (攻撃一空)
e. *tentera-laoet* 「海軍」 (軍一海)

また、(39)に挙げた *djoeroe* 「専門家」のように、生産性の高い主要部名詞がいくつか見られる。

- (42) a. alat- 「道具一」: alat-perang 「兵器」(一戦争),
alat-sendjata 「兵器」(一武器)
- b. anak- 「子一」: anak-negeri 「国民」(一国),
anak-boeah 「乗組員」(一果実)
- c. kaoem- 「集団一」: kaoem-iboe 「母の會」(一母),
kaoem-pemoeda 「若人達」(一若人)
- d. kapal- 「船一」: kapal-perang 「軍艦」(一戦争),
kapal-indoek 「母艦」(一雌親)

修飾部名詞としては、*-Nippon* 「一日本の」の生産性が高く、*poetera-Nippon* 「日本男児」(息子一日本)、*Tentera-Nippon* 「日本軍」(軍一日本)などが見られる。

5.5 複合語に見られる特徴

5.1-5.4 節で記述した複合語の、(i) 構成要素の順序と (ii) 名詞用法の有無について注記しておきたい。

逆順による複合が可能なのは、副詞による *koerang-lebih, lebih-koerang* 「おおよそ」(5.1 節)、動詞による *mati-hidoep, hidoep mati* 「生死」、および *bangkit-djatoeh, djatoeh bangkit* 「興亡」(5.2 節)、形容詞による *besar-ketjil, ketjil-besar* 「大小の」(5.3 節) といった、いずれも主要部無し、対義・反意の複合語に限られていた。

また、対義語や混淆による複合語には名詞用法を持つ動詞複合語や形容詞複合語が見られた。しかし、類義語による動詞複合語や形容詞複合語には名詞用法が見られず、それぞれ動詞用法と形容詞用法を持つ。名詞複合語を除

き、類義語による複合語によって名詞用法が生じない点は、各複合語に共通する特徴と言える。

6. 省略

『ボルネオ新聞』のマレー／インドネシア語版に *B. S.* (*Borneo Simboen*) という省略がある (稲垣 2020 : 212) ように、*Penarta Selebes* にも *P. S.* というイニシャルリズムが見られる。*Penarta Selebes* におけるイニシャルリズムは、そのほとんどが表記上の変異を見せず、大文字であればほぼ常に大文字表記、小文字であればほぼ常に小文字表記される。また、ほとんどの場合、ピリオドで各字が隔てられる。

オランダ語によるイニシャルリズムとして以下のものが見つかる。

- | | | | | |
|------|----|-------------|-------------------------------------|-----------------|
| (43) | a. | A. V. B. | Algemeene Volkscredietbank | 「庶民金融銀行」 |
| | b. | P. I. D. | Politieke Inlichtingendienst | 「政治情報部」 |
| | c. | K. P. M. | Koninklijke Paketvaart Maatschappij | 「王立貨物輸送」 |
| | d. | M. U. L. O. | Meer Uitgebreid Lager Onderwijs | 「中等学校 (拡充初等教育)」 |

(43d) のような学校種別の名称は、*H. B. S.* 「普通科中等学校 (Hoogere Burgerschool)」など、比較的多いが、ここでは割愛する。(43d) の *M. U. L. O.* は、*Mulo* という表記も頻繁に見られ、アクロニム化して「単語読み」されていたことが伺われる。

他の外来語では、ドイツ語の *D. N. B.* 「ドイツ大本营 (Deutsche Nachrichtenbüro)」や、ラテン語由来の *T. B. C.* 「結核 (tuberculosis)」があり、*T. B. C.* については小文字表記の *t. b. c.* も見られる。

日本語から形成されたイニシャルリズムもいくつか見られる。

- (44) a. H. K. G. Hutu Ko Gakkoo 「普通公学校」
 b. H. Z. K. G. Hutu Zyokyyu Ko Gakkoo 「普通上級公学校」
 c. D. H. T. G. Dansi Hutu Tyuu Gakkoo 「男子普通中学校」
 d. Z. H. T. G. Zyosi Hutu Tyuu Gakkoo 「女子普通中学校」

学校種別のイニシャルイズムでは、HはHutu（普通）、KはKo（公）、GはGakkoo（学校）、DはDansi（男子）と決まっているが、ZはZyookyyu（上級）ないしZyosi（女子）をあらわすため二義的である¹⁶⁾。

企業名を提示するほとんどの場合、K. K. が後置される。例えば、*Nanyo Kobatu K. K.*（南洋興発）、*Nantaibo K. K.*¹⁷⁾（南太貿＝南太平洋貿易）、*Okura Doboku K. K.*（大倉土木）、*Toindo Suisan K. K.*（東印度水産）などが見られる。この場合、K. K.はKabusiki Kaisha（株式会社）のイニシャルイズムである。

マレー／インドネシア語によるイニシャルイズムは、～*d. l. l.*「～など」や*k. l.*～「およそ～」などの機能語的なものと*b. b.*「平日（hari biasa）」を除くと、*koempoelan*「団体」という語を冠した団体名のイニシャルイズムが散見される¹⁸⁾。また、(45)のキリスト教関連の団体名がしばしば見られる（それぞれ、Aritonang-Steenblink 2008: 435; 428を参照）。

- (45) a. G. M. I. M. Geredja Masehi Indjili Minahasa 「ミナハサ福音教会」
 b. K. G. P. M. Kerapatan Geredja Protestan Minahasa
 「ミナハサプロテスタント教会連盟」

7. その他の特徴

7.1 複数化

現代インドネシア語と同様、職業や役割をあらわす人間名詞に機能語のpara「～達」が前置することで複数が示されるが、*Pewarta Selebes*に特有なのは、

特に高頻度の名詞に *para-* が接頭され、ハイフンでつなげて綴られ得ることである¹⁹⁾。

- (46) a. *para-moerid / para moerid* 「生徒達」
- b. *para-wartawan / para wartawan* 「記者達」
- c. *para-pembatja / para pembatja* 「読者達」
- d. *para-penonton / para penonton* 「観客達」

さらに、*para moerid-moerid*「生徒達」や *para opsir-opsir*「兵士達」等のように、多様／複数性をあらわす重複語に *para* が前置される場合も少なくない。

全称数量詞として用いられる *sekalian*「全て、皆」によっても複数性が示される。“*para* + 名詞”は“*sekalian* + 名詞”であらわすことができる。逆は必ずしも真ではない。

- (47) a. *sekalian moerid* 「全生徒」
- b. *sekalian wartawan* 「全記者」
- c. *sekalian manoesia* 「全人類」 (**para manoesia* は見つからない)
- d. *sekalian rakjat* 「全人民」 (**para rakjat* は見つからない)

さらに、*sekalian moerid-moerid*「全生徒達」や *sekalian anggota-anggota*「全会員達」のように、重複語と共に使われる場合や、*sekalian para wartawan serta pemimpinja*「記者およびその経営者達全員」(*PS* 1943/11/13) のように *para* と共起する場合がある。この後者の例で示されるように、全称の *sekalian* は、複数の *para* よりも統語的に外側に位置する、上位の数量概念である。

para とは違い、*sekalian* は、人間名詞以外の複数／全称性を示すことができる。

- (48) a. *Sekalian pesawat² Teikoku kembali dengan selamat.* (PS 1943/10/2)

「帝国（＝日本）の全ての飛行機が無事に帰還した。」

- b. *Divaktoe orang toea ini melihat sekalian peristiwa ini,* (PS 1944/2/19)

「この親がこの総ての出来事を見たとき、」

(47), (48) のような“*sekalian* + 名詞”の順序だけでなく、“名詞 + *sekalian*”の順序もある。

- (49) *Seperti soedah diketaboei oleh pematja sekalian wartawan kita tn. O. H. Pantou ...*

(PS 1944/1/8)

「読者の皆さんには既知の通り、我らが記者 O. H. パントウ氏は …」

(誤訳：読者には既知の通り、我らが全記者 O. H. パントウ氏は …)

(49) の例には、*sekalian wartawan kita* 「我々の全記者」という解釈はあり得ない。なぜなら、直後に並置され等価であるはずの *tn. O. H. Pantou* が一個人、即ち単数だからである。代わりに、*pematja sekalian* 「読者全員、読者達」という解釈が最適となる²⁰⁾。

sekalian には数量詞遊離の解釈があり得るとはいえ、前置されて文頭／節頭に生起する場合や、後置されて文末／節末に生起する場合は、直後／直前の名詞ないし名詞句と [全称の構成素] を成す。以下の (50) のように、名詞の所有者 (*-koe* 「私の」) や属性 (*asli* 「本来の」) 等をあらわす要素は、[全称の構成素] の内部に生起する。

- (50) a. [*bangsakoe sekalian*] 「我が民族達」 (*[*bangsa sekalian*] *koe* は無し)

- b. [*pendoedoek asli sekalian*] 「先住民達」 (*[*pendoedoek sekalian*] *asli* は無し)

sekalian が後置される場合、先行する名詞／名詞句は重複していることが

多い（例：*moerid-moerid sekalian* 「生徒全員」、*toean-toean sekalian* 「皆様方」）が、(49) の *pembatja* のように重複しない場合もある。同様に、比較的高頻度の *rakjat sekalian* 「民衆達」や *pendoedoek sekalian* 「住民達」は重複を伴わない²¹⁾。

“人称代名詞 + *sekalian*” の構成素もある。その人称代名詞には、2 人称単数の *kamoe* に加え、複数では、1 人称の *kami, kita* および 3 人称の *mereka* が該当する。*sekalian* は、単数代名詞と共起する場合は「～達」（複数）を意味し、複数代名詞と共起する場合は「～全員」（全称）を意味する。逆の語順による“*sekalian* + 代名詞”は無い²²⁾。

(51)	単数代名詞 + <i>sekalian</i>	複数代名詞 + <i>sekalian</i>
1 人称	—	<i>kami sekalian</i> 「私達（除外）全員」 <i>kita sekalian</i> 「私達（包括）全員」
2 人称	<i>kamoe sekalian</i> 「君達」	—
3 人称	—	<i>mereka sekalian</i> 「彼ら全員」

他方、マナド・マレー語（スラウェシ島）に見られる、*orang* 「人」を使った代名詞複数形が *Pewartu Selebes* にも見つかる²³⁾。ただし、その生起は、とあるコーナー“Podjok”の文章中など²⁴⁾、紙面の中でも極めて限られている。

- (52) a. *sebab kitaorang boekan soesab-bati, [...]* (PS 1944/2/22, Podjok)
 「だって僕らは憂鬱ってわけじゃない、」
- b. *roepanja diaorang loepa akan harga2 padi pada waktoe keperintahan belanda (1940)*
 [...]
 (PS 1943/7/1)
 「どうやら彼らはオランダ政庁（1940）のときの稲の値段のことを忘れてる」
- c. *Kita bilang pa dorang.* (PS 1944/7/25, Podjok)
 「僕は彼らに言った。」

(52a) の *kitaorang* は、マナド・マレー語の 1 人称単数の *kita* 「僕」と *orang* 「人」の複合によって形成された 1 人称複数形である。同じく (52b) の *diaorang* は、3 人称単数の *dia* 「彼／彼女」と *orang* によって形成された 3 人称複数形であり、これが縮約されて (52c) の *dorang* 「彼ら」が作られる。ちなみに、(52c) の *kita* も *pa* もマナド・マレー語の語彙であり、*pa* は与位格的な前置詞である (Stoel 2005: 40–43 を参照)。

7.2 語彙

3.1 節で取り上げた *tepergantoeng* 「頼る、託す」と同様、スラウェシ島に特有の語彙がしばしば見られる。

(53) *tibo* 「仲買 (人)」²⁵⁾

si-belante atau si-tibo beli dari si-tani satoe boeah doerian dengan barga f 0,50 serta djoeal doerian itoe kepada si-pembeli, kepada si-pemakai dengan barga f 1.-.

(PS 1944/2/3)

「ブローカーないし仲買人が農家からドリアン一つを 0.5 グルデンで買い、そのドリアンを買い手や消費者に 1 グルデンで売る。」

(54) *Hoekoem toea* 「村長」、*kepala djaga* 「小字長」、*meweteng* 「助役」²⁶⁾

Pada zaman pemerintah almarhoem dalam satoe negeri ada Hoekoem toea, kepala djaga, meweteng, [...]

(PS 1944/4/22)

「亡き政庁の時代、一つの地方には村長、小字長、助役、[...] がいた。」

(55) *tjap tikoës* 「鼠マーク (蒸留酒の通称)」、*sagoer* 「(椰子酒)」²⁷⁾

Pasal 1. Jang diseboet tjap tikoës dalam atoeran ini, jaitoe alkohol jang diboeat dari sagoer jang berasal dari pohon seho (enau).

(PS 1944/4/11)

「第一条、本規定で鼠マークと呼ぶのは、これ即ち、セホの木 (サ

トウヤシ) を原料とするサグエル酒から造られるアルコールのことである。」

ただし、Jones (2007: 272) によると、*sagoeer* は、ポルトガル語からオランダ語に入った *sagoweer/saguweer* を基にした借用語とされる。このほか、来源をポルトガル語とする借用語のうち、紙面に見られる東インドネシアに特有の形式としては、*kintal* 「(中) 庭」や、*tjepatoe* 「靴」などがある²⁸⁾。

一方、第2節でも言及した通り、来源をオランダ語とする借用語は、例えば (56) のように原語に対してほぼ忠実に綴られる。これは、当時のスラウェシではオランダ語由来の借用語が充分には定着していなかったことを示唆している。以下、オランダ語の形式および [音声表記] と、Jones (2007) における掲載ページを付記する。

- (56) a. koelkast 「冷蔵庫」 (← koelkast [ku'lkast], p. 173)
b. miljard 「10億」 (← miljard [miljart], p. 203)
c. partij 「政党」 (← partij [partɛi], p. 235)
d. produksi 「生産」 (← produktie [pro'dyksi:], p. 251)
e. ransoen 「配給」 (← rantsoen [rantsu:n], p. 260)

4. おわりに

本論文では、*Pewartu Selebes* において使用されているマレー／インドネシア語を対象として、その綴り、形態法、語彙について実証的な記述をおこなった。現代語と比較して考えると、概ね、現代マレー／インドネシア語の知識に基づいて *Pewartu Selebes* を読み解くことができると言える。ただし、東インドネシアのマレー語変種の形態法や語彙が入り込んでいる箇所があり、その読解には注意が必要である。

音韻については、固有名詞や借用語等に重母音や重子音が顕著に見られることが分かった。そして、わずかだが、重子音と単子音の交替現象が伺われた。今後、この交替が生じる条件等を探ることも視野に入れておきたい。

接辞については、*Pewartia Selebes* に特徴的な *ber-*, *meN-*, *di-*, *ter-* の用法を中心に記述をおこなった。とりわけ、東インドネシアのマレー語変種の片鱗として、相互をあらわす接頭辞 *bakoe-* が顕現していることを明らかにした。

重複については、*ke-* を添加した数詞重複語が、総数をあらわす限定要素として用いられることを、現代インドネシア語との相違に言及しつつ記述した。これも *Pewartia Selebes* に現れるマレー語変種の特徴の一つである。

複合語については、内容語の語基を中心として、ハイフン表記される複合語の分類を提示した。その中で、前部・後部要素を逆順にするための条件と、複合語の名詞用法の範囲について記述一般化をおこなった。この記述一般化は、現代語の複合語研究に応用し得る。複合語の認定要件候補としてのハイフン表記と合わせ、現代マレー／インドネシア語の記述研究に寄与するものと思われる。また、本論文では考察の対象外としたが、派生語を構成要素とする複合語については、今後、その分類と記述を進めたい。

省略語については、*Pewartia Selebes* に見られるイニシャルリズムを記述し、大文字／小文字表記やアクロニム化等の変異があまり見られない点を指摘した。

その他の特徴として、*orang* 「人」を使った東インドネシア特有の複数化や、現地のマナド・マレー語に特有の語彙を取り上げ、*Pewartia Selebes* に見られる特異な点を明らかにした。

同時期に発行されていた *Borneo Simboen* との比較や、新聞以外の、同時期の著作物における言語学的特徴を射程に含めた研究も、今後の課題としたい。

注

- *本研究は、JSPS 科研費 20H01261 「マレー語地域における言語使用実態と言語シフトの変数の研究」(研究代表者：内海敦子) および、AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」(研究代表者：内海敦子) の助成による成果の一部である。内海敦子氏、Mangga Stephanus 氏には本論文の草稿にたいして有益なコメントをいただいた。記して謝意を表したい。言うまでもなく、本論文における誤りは全て筆者が責を負っている。
- 1) 末廣 (1975 : 54) には、*Pewartar Selebes* の「創刊は昭和 18 年 [1943 年] 4 月 29 日、終刊は昭和 20 年 8 月 21 日」とあるが、岸幸一コレクション (2019) には 1943 年 5 月 27 日から 1944 年 8 月 26 日までが所蔵されている。
 - 2) 旧綴りの詳細については、稲垣 (2020 : 199-202) も参照されたい。
 - 3) ここで言う「代名詞的要素」というのは、*saja* 「私」、*kita* 「私達 (包括)」などの人称代名詞に加え、*Bapak* (父)、*Ibu* (母) といった、転用されることで 2 人称を指す親族名詞である。これら 1・2 人称が動作者である場合、その受動形式は普通「代名詞的要素 + 語基 (+ -kan/-i) 」であり、*di-* が使われない。しかしながら、*soedablah dibantoe oleh kamoe* 「貴君には助けられた」(PS 1943/6/17) や、*penerbang kita itoe dapat ditolong oleh kita*。「その我らが飛行士は私達が救助することができた (← 私達に救助されることができた)。」(PS 1943/10/9) など、2 人称 (を含む) 動作者の場合に *di-* を使う例が散見される。
 - 4) Badudu (1986 : 27) が指摘するような、西ジャワなどで観察される “*ditikahkan*” (← *di-nikah-kan* 「結婚させられる」) や “*ditaikkan*” (← *di-naik-kan* 「上げられる」) といった語基頭の /n/ の脱鼻音化は、*Pewartar Selebes* においては見つかっていない。
 - 5) 本文の例以外にも、従属節では *Kalau diminta tempat jang istimewa dan tanggal jang tentoe, tambab 20 sen boeat tiap-tiap baris*。「特定箇所および日付指定で (広告を) ご依頼 なさいます際は、行ごとに 20 センを追加 (でお支払い) ください。」(*Pewartar Selebes* 題字横) のように *diminta* が現れ、主節では *Dipinta dengan bormat kepada sekalian toean2 langganan Pewartar-Selebes, kiranja toean2 soedilab ...* 「プワルタ・セレベス定期購読者の皆様には、謹んで… くださいますようお願いいたします。」(記事外のお知らせ) のように *dipinta* が現れる例が見られる。
 - 6) Badudu (1986 : 27) は、「北スラウェシでは、話者達は (標準的な) 「君に頼

る」*bergantung* [...] という形式よりも、「君に頼る」*tepergantung* という形式の方に馴染みがある」(Di Sulawesi Utara, bentuk *tepergantung kepada Saudara* lebih dikenal pemakai bahasa daripada bentuk *bergantung kepada Saudara* [...]) と述べている。ちなみに、*tepergantung* と共起する前置詞として、Badudu は *kepada* を示しているが、*Pewarta Selebes* では *kepada* との共起例は見つかっておらず、*dari* や *daripada* が見られる。

- 7) *pe-an* と *per-an* の自由変異は、現代のマナド・マレー語においてはもはや見られず、*per-an* を使用するのが一般的のようである。これは、教育やメディアにおける標準インドネシア語が浸透した結果と考えられる(内海敦子 p. c.)。
- 8) マレーシアのマレー語では、重複を伴う“*ke-* 数詞 - 数詞”が総数を示すが、現代インドネシア語では重複を伴わない“*ke-* 数詞”が被修飾名詞に前置されることで総数を示す。
- 9) 「砕け散る」「消失する」の“動詞+動詞”以外に、同様の意味の述部として用いられる“動詞+形容詞”として、*goegoer-binasa*「壊滅する」(散る一滅びた)、*habis-binasa*「消滅する」(無くなる一滅びた)、*hantjoer-leboer*「崩壊する」(大破する一滅した)が見られる。
- 10) 複合動詞 *poelang-pergi*「往復する」と同じく排反的な対義語を連ねた *mendaki-menoeroen*「上り下りの(坂)」「(上る一下る)は、動詞述部よりも形容詞的な連体用法を見せる(例: *Paniki Bawah-Maoembi djaoehnja 4,7 km, djalan berbatoo dan mendaki-menoeroen* 「パニキ・パワーマウンビ間、距離 4.7 キロメートル、岩だらけかつ上り下りの道」, *PS* 1943/11/11)。ちなみに、“動詞+動詞”の複合語の中で、*mendaki-menoeroen* のような *meN-* 動詞が含まれる複合語は稀である。構成要素が対義関係にはない例、*madjoe-menjerang*「侵攻する」(進む一攻める, *PS* 1944/4/18)、*menjamboet-menjerang*「迎え撃つ」(迎える一攻める, *PS* 1944/7/4)、*menghantjoer-memoesnahkan*「潰滅させる」(潰す一滅ぼす, *PS* 1943/5/27)などに動詞述部としての用例がわずかに見つかっている。
- 11) 「反撃」を意味する複合語として、“名詞+ *meN-* 動詞”の *serangan-membalas* が何例も見つかる(*PS* 1943/6/8, 1943/9/30, 1943/10/23 など)が、*balasan*「仕返し」を使った“名詞+ *-an* 名詞”の *serangan-balasan* の方が頻度が高い。そもそも、“名詞+動詞”による複合語において、“動詞”に *meN-* 動詞が使われるのは極めて稀である。
- 12) 反意語による“形容詞+形容詞”の *ketjil-besar* は、*kantor dagang ketjil-besar*「大

- 小の営業所」(PS 1943/7/1)のように複合形容詞として用いられることもあれば、*Kita sekalian, toea-moeda, ketijl-besar*「私達全員、老若、大人子供」(PS 1944/7/25)のように総称的な名詞へと転用されることもある。一方、逆順の *besar-ketijl*「大小の」は名詞として用いられず、複合形容詞として用いられる。
- 13) *maha* がサンスクリットの接頭辞 *maha-*「偉大なる」を来源とする (Jones 2007: 188 を参照) という通時的観点に基づくと、*maha-* は「最上」を示す接頭辞だと分析できる。しかしながら、*Pewartar Selebes* における *maha* は独立した語として表記されることが多い。例えば、*maha besar*「最大の」(1943/6/8, ほか 8 例が見つかった)、*maha dabsjat* (1943/5/27, ほか 15 例)、*maha hebat* (1943/6/26, ほか 8 例)、*maha goeroe*「教授」(1943/7/3, ほか 6 例)、*maha gagab*「最も勇猛な」(1943/6/10, ほか 3 例)、*maha koeasa*「全能の」(1943/6/4, ほか 5 例)、*maha loeas*「最も広大な」(1943/6/1, ほか 2 例)、*maha moelia*「最も高貴な」(極めて多数)、*maha penting*「最も重要な」(1943/7/1, ほか 5 例)、*maha soetji*「最も神聖な」(1944/2/5, ほか 3 例) などの表記が、ハイフン表記に比して大多数を占める。ちなみに、現代インドネシア語の *mahabesar* のような一続きの表記は *Pewartar Selebes* において見つかっていない。
- 14) 「隣組」に対して、*roekoen-tetangga* 以外に、*ikatan-tetangga* (～会一隣人) という表現をあてているケースも見られる (PS 1944/4/11, *Podjok*)。
- 15) 現代マレー／インドネシア語には、「内陸側／南」を意味する *daya* という語は無く、この意味を反映する形式として、*Dayak*「ボルネオ内陸居住民」という語と、*barat daya*「南西」という方角表現が残っているにすぎない。同様に、*laut*「海」にも「海側／北」という方角の含意は無く、*barat*「西」や *timur*「東」と組み合わせられて初めて「北西」「北東」といった方角を示す。Adelaar (1992: 115; 1997) によると、シュリーヴィジャヤ王国があったとされるスマトラ島南東部から見て海が北側に広がり、陸が南側にあったため、14世紀まではこれらの地理的表現 *daya* と *laut* が方角表現として使われていたとされる。
- 16) *Z* が *Zyo(o)kyu(u)* と *Zyosi* のどちらにも該当することから、*H. T. Z. Ko-Gakkoo* (PS 1944/1/20) や、*moerid² Z. Ko Gakkoo* (PS 1944/1/11) といった少数の変異の場合、末尾の *Ko Gakkoo* を見るまでは、単独で *Z* を *Zyookuu* とは断定できない。ちなみに、ここでの *H. T.* は、本文に挙げた *Hutu Tyuu* (普通中) をあらわすのではなく、*Hutu* (普通) の省略表記である。「普通」は、多くの場合 *H.* だけで示される。

- 17) 太田 (1980: 493-497) に挙げられている南方進出企業のうち、セレベスに進出したものの中に Nantaibo と読める企業名は見つからないが、省略した場合にそのように読めるものとして「南太平洋貿易」(p. 494) がある。Nantaibo は「南太貿」という日本語の略語をそのまま翻字したものだろう。
- 18) 団体名の中には、P. K. ... 「…者組合 (Perkoempoelan Kaoem …)」ならびに「…者連盟 (Perserikatan Kaoem …)」や、S. B. ... 「…労働組合 (Serikat Boeroeh …)」といったイニシャルズムを使ったものが見られる。
- 19) *para diam* 「居住者達」(PS 1944/3/4) のように、動詞や形容詞を名詞に転換しつつ複数性を示している *para* の用例も見つかるが、このようなケースは極めて稀である。通常は、本来的に名詞である語に *para* が前置／接頭される。
- 20) 一文の中に“*sekalian* + 名詞”と“名詞 + *sekalian*”が共起する例も見られる。
例：Toean Amny, sebagai wakil *sekalian* Tonarigumityo, memperdengarkan „soempah” dari Tonarigumityo *sekalian* terhadap beban kewajiban yang dipikloelkan dibahoe mereka. (PS 1944/5/3) 「アヴィ氏は、全隣組長の代表として、彼らの肩にのしかかっている義務負担に対しての、隣組長らによる「宣誓」を（読んで）聞かせた。」
- 21) 全称構成素の *rakjat sekalian* と *pendoedoek sekalian* がそれぞれ *rakjat* および *pendoedoek* を重複させない要因として、(i) その使用頻度の高さが形式の最小化を促している可能性、(ii) 重複によって示され得る複数性が全称構成素にとって不要である可能性、(iii) *rakjat* 「人民」、*pendoedoek* 「住民」という語彙がそもそも複数の個体を指示しているために重複が回避される可能性などを考慮する必要がある。
- 22) 1人称単数の *saja*, *akoe* や、3人称単数の *dia*, *ia*, *belian* を使った“代名詞 + *sekalian*”の構成素は、*Pewartar Selebes* には見つかっていない。また、現代インドネシア語に見られる2人称複数代名詞 *kalian* も見つかっていない。*Pewartar Selebes* では、2人称複数であらわす場合、重複による *toean-toean* (や *saudara-saudara*)、およびそれに *sekalian* を後置したもの、あるいは *kameo sekalian* が用いられる。
- 23) Paauw (2009: 161-170) で示されているように、東インドネシア地域のマレー語変種には“代名詞単数形 + *orang* 「人」”によって複数形が形成される。例えば、マナド・マレー語の人称代名詞は、1人称単数 *kita*, 1人称複数 *torang* (除外・包括の別無し)、2人称単数 *ngana*, 2人称複数 *ngoni* (=テルナテ島の言語からの借用とされる)、3人称単数 *dia*, 3人称複数 *dorang* であり、1人称複

数形が *kita+orang* からの縮約, 3人称複数形が *dia+orang* からの縮約によるものと考えられる。内海敦子 (p. c.) によると, 現代のマナド・マレー語口語では, 非縮約形の *kitaorang*, *diaorang* は通常使われない。これは当時の口語においても同様であった可能性がある。そのため, *Pewartar Selebes* に見られる非縮約形は, 文語体を意識した形式である可能性がある。

- 24) “Podjok” 「(世相) コーナー」は, 1944/1/25 から確認でき, 同年 4/22 までは第 3 面右上, 約 3 ヶ月をはさんで同年 7/4 から 8/10 までは第 2 面の左上等の隅に掲載された。インフォーマルなマレー語変種や口語 (*Adoeoeoe* のような間投詞や長音表記等) をおろまぜながら, 新聞の読者にとって身近と思われる事柄を取り上げた「コーナー」である。
- 25) *Pewartar Selebes* において, *tibo* 「仲買 (人)」は *batibo* や *tibo-tibo* といった形式でも現れる。Salea-Warouw (1985 : 127) によると, マナド・マレー語における *tibo* は「仲買人」(*tengkulak*) を意味する。加えて, *Tambayong* (2007 : 28, 329) には, *batibo* と *tibo* の記述があり, *batibo* を「利益の軽微な小規模売買をする」とする一方で, *tibo* を「現在では, 仲介人やブローカー (*makelar*, *komisioner*, *tengkulak*) のように商売をすることを意味する」と記述している。また, スラウェシ島北部で話される諸言語は相当の量の語彙をマナド・マレー語から借用している (Prentice 1994 : 411) が, そのうちの一つであるゴロンタロ語において, *batibo* は「故買人」(*tukang tadah*) を意味する (Pateda 1977 : 60 を参照)。
- 26) Salea-Warouw (1985 : 91) は, *kuntua* の項に “*hukum tua*” と “*lurah*” 「村長」という定義を与えている。*Tambayong* (2007 : 90, 137) は, *hukumtua* を「一村の長という公職。この呼称は現在も使用されており, ‘*kuntua*’ と発音される」と記述し, *kuntua* を「ミナハサ地域の *ukung tua* という語 (オランダ綴りでは *hoekoem toea* であるもの) がこのように発音されたもの」としている。この *kuntua* は, *ukung/hukum tua* — (初頭音節削除) → *kung/kum tua* — (鼻音の同化) → *kuntua* のように形成されたと分析できる。また, Supit (1986 : 49–50) によると, *kepala djaga* 「小字長」は, かつて “*tu’a in lukar*” と呼ばれ *meweteng* 「助役」とともに村長を補佐していたが, 個人主義の時代になってその役割に変化が生じ, 村長 > 小字長 > 助役という序列ができたとされる。
- 27) Salea-Warouw (1985 : 44, 119) によると, マナド・マレー語の *cap tikus* は「蒸留酒」(*arak*) を意味し, *saguer* は「椰子酒」(*tuak*) を意味する。*Tambayong* (2007 :

- 90) によると, *captikus* は, 「鼠と見られる動物の絵がボトルにある, 数世紀前のジュネバ・ジン *jeniwir* (オランダ語: *jenever*) の商標に由来する」とされる。
- 28) 「(中) 庭」と「靴」をあらわす語は, 東インドネシアのマナド・マレー語 (Salea-Warouw 1985 : 86 ; 44) および, アンボン・マレー語 (Takaria & Pieter 1998 : 74 ; 34) において, それぞれ *kintal* と *capatu* である。それぞれ, ポルトガル語の *quintal* と *sapato* に由来する (Jones 2007 : 155, 283)。現代インドネシア語では, *halaman* と *sepatu* という語が用いられる。

参考文献

- 稲垣和也 (2020) 『『ボルネオ新聞』(1942-45) のマレー／インドネシア語における形態法についての覚書』『アカデミア 文学・語学編 (南山大学)』107 : 197-222.
- 太田弘毅 (1980) 「海軍南方占領地に進出した日本の企業会社」『東南アジア研究』18(3) : 488-501.
- 岸幸一コレクション (2019) 「D. 南方軍政 : D9 セレベス新聞」, デジタルアーカイブス: 近現代アジアのなかの日本, 日本貿易振興機構アジア経済研究所 (URL: https://d-arch.ide.go.jp/asia_archive/collections/Kishi/d_09.html).
- 岸幸一・西島重忠 (編). (1959) 『インドネシアにおける日本軍政の研究』, 早稲田大学大隈記念社会科学研究所刊行, 東京: 紀伊国屋書店.
- 末廣昭 (1975) 「岸幸一資料目録」『アジア経済資料月報』17(12) : 1-56.
- 早瀬晋三 (2016) 「日本占領・勢力下の東南アジアで発行された新聞」『アジア太平洋討究』27 : 61-100.
- Aritonang, Jan Sihar & Karel Steenbrink (eds.) (2008) *A history of christianity in Indonesia* (Studies in Christian Mission 35). Leiden, Boston: Brill.
- Badudu, J. S. (1986) *Inilah Bahasa Indonesia Yang Benar II*. Jakarta: Gramedia Pustaka Utama.
- Jones, Russell (ed.) (2007) *Loan-words in Indonesian and Malay*. Leiden: KITLV Press.
- Paauw, Scott H. (2009) *The Malay contact varieties of Eastern Indonesia: A typological comparison*, Unpublished doctoral dissertation, State University of New York.
- Post, Peter (2010) Historical overview. In Post, Peter, William H. Frederick, Iris Heidebrink, Shigeru Sato (eds.) *The encyclopedia of Indonesia in the Pacific War*, 5-60 (Handbook of Oriental Studies: Section Three, Southeast Asia 19). Leiden, Boston: Brill.

- Prentice, David J. (1994) Manado Malay: Product and agent of language change. In Dutton, Tom & Darrell T. Tryon (eds.) *Language contact and change in the Austronesian world*, 411–441 (Trends in Linguistics: Studies and Monographs 77). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Salea-Warouw (1985) *Kamus Manado-Indonesia*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Sato, Shigeru (2010) Occupation: Administration and policies. In Post, Peter, William H. Frederick, Iris Heidebrink, Shigeru Sato (eds.) *The encyclopedia of Indonesia in the Pacific War*, 61–147 (Handbook of Oriental Studies: Section Three, Southeast Asia 19). Leiden, Boston: Brill.
- Stoel, Ruben (2005) *Focus in Manado Malay: Grammar, Particles, and Intonation* (CNWS Publications 134). Leiden: CNWS publications.
- Supit, Bert (1986) *Minahasa: Dari amanat Watu Pinawetengan sampai gelora Minawanna*. Jakarta: Sinar Harapan.
- Takaria, D. & C. Pieter (1998) *Kamus bahasa Melayu Ambon-Indonesia*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Tambayong, Yapi (2007) *Kamus bahasa dan budaya Manado*. Jakarta: Gramedia Pustaka Utama.